

日本財団

東日本大震災 番屋再生事業報告書

2015年3月

ver.1



東日本大震災の発生以降、日本財団では海や水産業に関わる復興支援事業を、時期や内容に応じて以下の3つのステージに整理しました。

- ①緊急支援ステージ： 海を生業とする仲間の命と安全を守る
- ②復興基盤支援ステージ： 海の生業・海と密着した暮らしを再生する
- ③生活文化の再生支援ステージ： ふるさとの誇りと地域コミュニティを取り戻す

そして被災地の状況を見極めつつ、それぞれのステージで必要とされる支援を行っています。

緊急支援ステージでの支援を行っていたとき、被災した漁師の方々から「漁港は整備され始めたが、漁に出る前は自分の車の中で待たなければならない」「壊れた漁具は仮設住宅で修理している」「震災以降、漁師仲間と顔を合わせる機会が減った」といった声を聞くことが多々ありました。

なぜ漁師の方々は、このような不便を強いられたのでしょうか。

さらにヒアリングを続けると、震災前は「番屋」と呼ばれる簡易な小屋で、漁師仲間と顔を合わせて作業をし、時には暖を取りながら天候が回復するのを待っていたことがわかりました。また、「番屋は漁師にとっては必要な施設」という声は漁業関係者の中で一致していましたが、水揚げや魚市場での取引に直接関係のない番屋は、公的支援を受けづらい状況にありました。震災の影響で水揚げ量が戻らない中、漁師や地域の漁業協同組合だけで、番屋再建の費用を負担することもできません。

そこで日本財団では、復興基盤支援ステージから生活文化の再生支援ステージへ移行するための支援として、「水産業を中心とした新しいコミュニティ創生のための番屋再生事業」（通称：番屋再生事業）を実施することを決定。番屋の再建を通して地域コミュニティの再生を支援することにしました。

番屋を再建することで、漁師たちが自然と集い、浜の母さんたちが語らい、地域住民が交流し、子どもたちに笑顔が戻る。そして漁業を中心とした地域コミュニティ再生の牽引役となる……。番屋再生事業を通して、そんなお手伝いができることを願っています。

2015年3月
日本財団 海洋事業担当

はじめに	02
事業概要	03
番屋再生のコンセプト	04
完成番屋の分布	05
番屋レポート	06
八木みなと番屋	06
鯨ヶ崎（くわがさき）番屋	08
重茂（おもえ）コミュニティ番屋	10
三陸やまだ漁協番屋	12
尾崎白浜コミュニティ番屋	14
森里海研究所	16
大谷海岸番屋	18
長面浦（ながつらうら）番屋	20
宮戸番屋	22
完成番屋一覧／建設中番屋一覧	24
財源と協力団体	25

事業期間	：	2011年11月～継続中
支援番屋数	：	14棟
完成番屋数	：	9棟
建設中番屋数	：	5棟
支援金総額	：	426,745,000円（完成9番屋）

※支援番屋数は助成状況などにより、さらに増加する可能性があります。
※事業概要の数値は、2015年2月1日現在のものです。

番屋再生のコンセプト

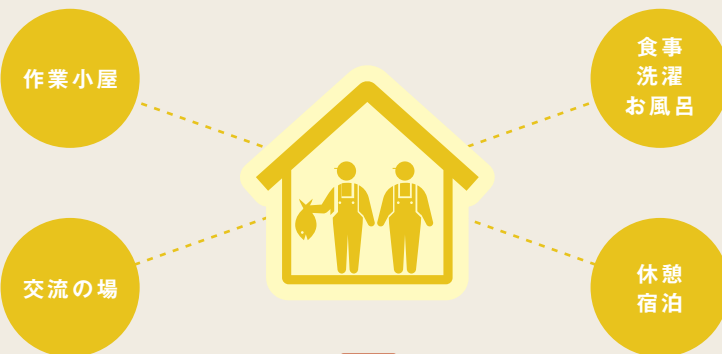
「番屋」とは全国各地にある、漁師の作業所や休憩所のことです。東北地方の漁港周辺にも、番屋と呼ばれる漁師たちの小屋があり、漁網の整備など漁の準備を行うだけでなく、遠方の港から来た漁船の乗組員たちが入浴や洗濯をする設備、休憩や宿泊ができる機能を備えている番屋もあったようです。

しかし、東日本大震災の津波により、無数の番屋が流出。漁師にとっては仕事の最前線基地がなくなり、漁業そのものに対する影響も図り知れないものがありました。さらに、漁業関係者が集える場所が失われ、漁業者間の連携も不足していきました。

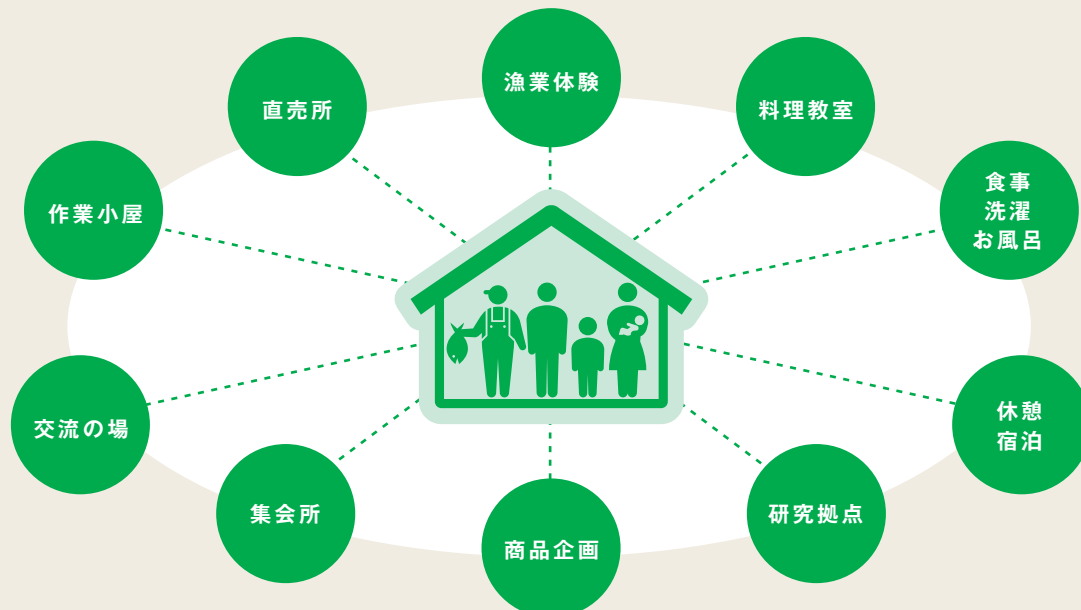
その一方で、番屋は漁業関係者のための施設であり、震災前は地域とのつながりが決して深いとは言えない場所でした。しかし震災では、漁業関係者も地域住民も同じように大きな被害を受けたのです。

そこで日本財団では、従来の番屋をそのまま再建するのではなく、新たにコミュニティ機能を付加した番屋の建設を支援。番屋再生をきっかけに、漁業関係者への支援のみならず、地域全体が再生し、復興がさらに加速するような支援を目指すことにしました。

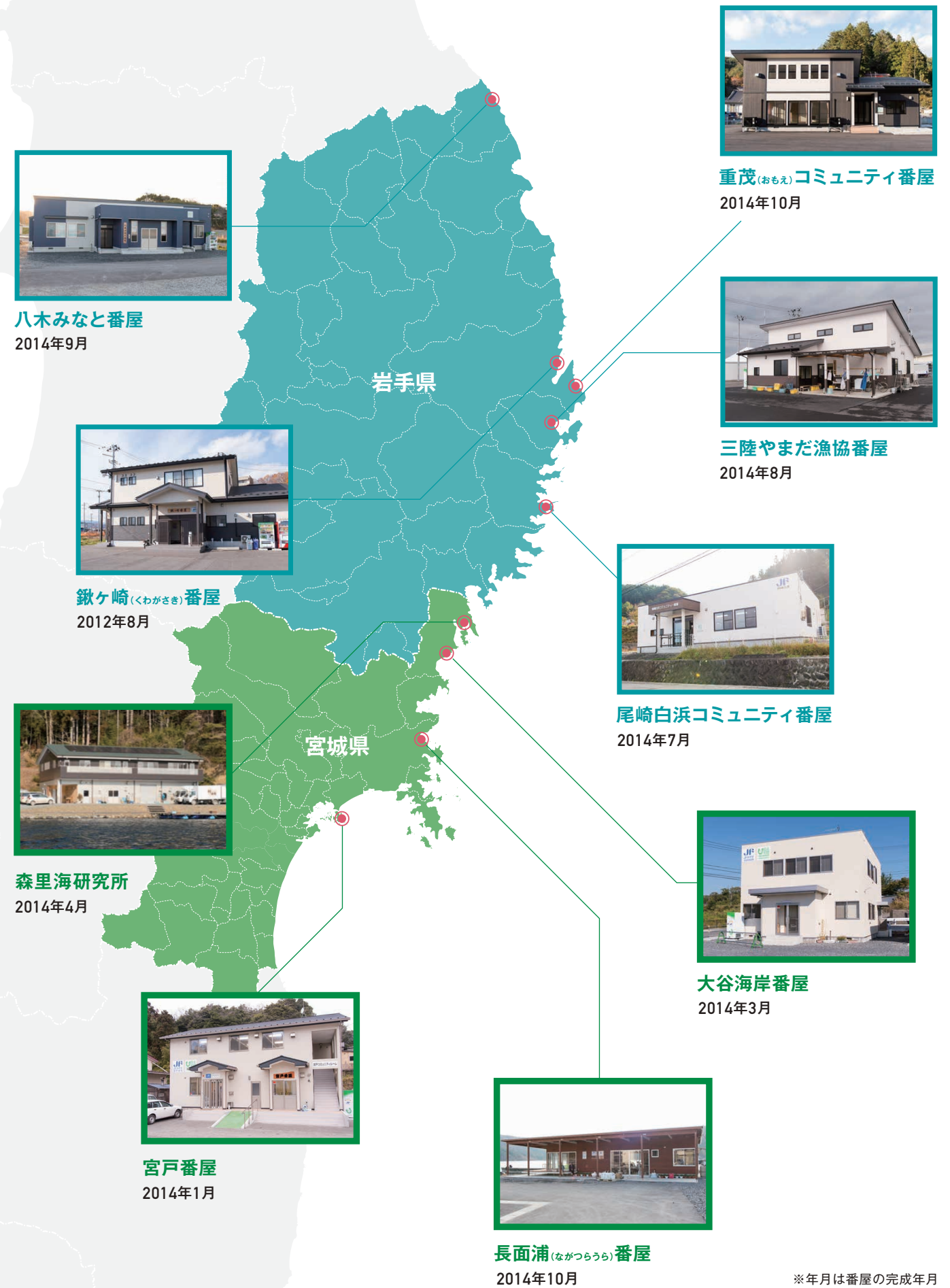
漁業関係者のための施設



地域コミュニティのための施設



完成番屋の分布



※年月は番屋の完成年月

八木みなと番屋

住所：岩手県九戸郡洋野町種市第2-73-3

所有：種市南漁業協同組合

完成：2014年9月

震災前後の状況

種市南漁協があるのは、岩手県の最北端に位置する洋野町。人口1万8千人あまりの太平洋に面した町だ。漁協の組合員は268名。天然のウニとアワビの漁が主力だが、カレイ、水ダコ、マダラなどの漁船漁業、また、サケやイカの定置網漁も盛んに行われてきた。

東日本大震災の津波により、漁港に隣接していた種市南漁協の建物は流出。魚市場は屋根と骨組みだけとなり、製氷工場も全壊した。漁船は小型船を中心に約100隻が海に飲み込まれ、サケのふ化場や荷さばき施設などの漁業関連施設も被災した。

魚市場が再開したのは2012年の初め。水揚げした魚介類を入れる万丈簗(ばんじょうかご)の代わりとなる箱を買い集め、電子はかりの代わりにアナログの上皿はかりを借りるなどして、再開にこぎつけた。

背景にあったのは、「魚市場を再開してほしい」という漁師たちの強い要望だった。洋野町の漁業は回復が早く、震災直後から水ダコの水揚げが行われていた。多くの漁船が流出していたが、残った船を共同利用することで、アワビやウニの漁も再開されていた。岩手県の北限にある洋野町は、他の地域に比べると津波の威力が弱かったことに加え、高台への避難道が整備されていたり、津波が来たら「まず逃げる」という訓練を徹底するなど、町ぐるみで津波対策に取り組んでいたことも奏功し、人的被害はゼロだった。結果的に、漁協職員をはじめとする漁業関係者は、町の漁業の復旧に集中することができたのだ。

震災前、2棟あった定置網漁師のための番屋も津波で流されたが、漁協が独自に再建していた。一方、地元の小型漁船や他地域のイカ釣り漁船の漁師たちが番屋として利用していた施設や、地域の集会拠点となっていた漁村センターも被災したが、これらの施設までは整備の手が回っていなかった。こうした状況を考慮し、日本財団は2つの施設の機能を統合した、コミュニティの拠点となる番屋の再建を実施した。

日本財団による支援

助成金額：37,120,000円／延床面積：161平方メートル／建築様式：木造1階建／設備機能：会議室、和室、浴室、調理室、多目的室

番屋の主な利用方法

- ・漁師(イカ釣り漁船)の休憩所
- ・漁業者の技術研修
- ・水産物の直売所
- ・地域住民の集会所
- ・行政機関の会議や研修



番屋の活用状況

イカ釣り漁師たちの1日はとても長い。明け方3時から4時の間に出港して、戻って来るのは夕方5時頃。種市南漁協の職員や組合員に手伝ってもらいながら、港にイカを水揚げしてようやく、体を休ませることができる。八木みなと番屋は、イカ釣り漁が行われる7月から12月までの6ヵ月間、漁師たちの休憩所として使われることになる。

彼らは番屋に来ると、まずお風呂を沸かす。その間に夕食を準備。お風呂で1日の疲れを落としてから、ゆっくりと夕食を取るのが日課だ。漁の最盛期には、番屋は多くのイカ釣り漁師たちでにぎわう。夕食のおかずも、各漁船で1品を用意することで、多彩になるという。イカ刺やタラチリ鍋、サバの塩焼きなど、漁師のまかない料理も多く登場する。夕食のお供にお酒が出てくるとも珍しくない。イカ釣り漁師たちは夜10時頃には船に戻り、翌日の漁に備えることになっている。

番屋は共同利用施設なので、イカ釣り漁師たちが宿泊することはない。番屋で寝るとしたら、台風で海が荒れたときなどに、出港できるかを見極めるまでの間、仮眠を取る程度だ。食事をする部屋やお風呂、トイレなどの掃除も利用者が分担して行われている。

種市南漁協にとっても、番屋は欠かすことのできない施設だ。休憩場所となる番屋があることで、イカ釣り漁師たちが寄港して水揚げをしてくれる。多くのイカが水揚げされれば、出荷や取り引きを担う漁協の収入増加にもつながるからだ。

一方、番屋はイカ釣り漁師の休憩以外にも、組合員の技術研修や行政機関の会合など、すでに多様な使われ方をしている。種市南漁協では今後、町の特産品であるウニの直販所や地域の人々の集会所としても活用することで、番屋をコミュニティの拠点にしていきたいと考えている。

利用者の声 南芳司さん イカ釣り漁船 漁師

私の漁船は青森県の大間町に所属していますが、20年以上、種市南漁協の魚市場にイカを水揚げしています。漁協の皆さんは水揚げを手伝ってくれますし、困りごとなどないか声も掛けてくれる。取引先というよりは、長年付き合っている仕事仲間という感じがですね。

新しい番屋ができる前は、魚市場の一角を間借りしたり、自分でプレハブを借りるなどして、休憩場所を確保していました。でも、魚市場は大人数と一緒に休めるほどの広さではありませんし、プレハブを借りるのもお金がかかります。結局、船の中になりました。船は揺れ続けるので疲れが取れませんが、仕方なかったです。

今は畳の上で休めるので、体も楽になります。本当に有難いです。番屋でお風呂に入り、夕飯を食べ、おしゃべりをしたりテレビを見たりしながらくつろぐと、「また明日も頑張ろう!」と思えます。新しい番屋はイカ釣り漁師たちに、元気を与えてくれる存在だと思いますよ。



鍬ヶ崎(くわがさき)番屋

住所：岩手県宮古市臨港通2番1号

所有：宮古漁業協同組合

完成：2012年8月

震災前後の状況

岩手県内で最大の面積を有する宮古市。三陸沖に豊富な漁場を抱え、震災前はサケやサンマ、スケトウダラなどで全国屈指の水揚げ量を誇っていた。また、ワカメやコンブ、カキ、ホタテなどの養殖業も盛んだった。

しかし東日本大震災の大津波により、宮古漁港に隣接していた魚市場や製氷工場は全壊。1000人以上の組合員がいた宮古漁協では、死者・行方不明者が17名にのぼり、漁船や自宅を流された人も相当数に達した。漁協の建物も港近くにあったが、高台に位置していたため津波の被害をまぬがれた。そこで宮古漁協の職員は組合員と一緒に、一刻も早く漁業を再開するための努力を始めた。

その結果、震災から1ヵ月後の2011年4月11日には魚市場を再開。建物は屋根と骨組みだけの状態だったが、漁港に水揚げされた魚介類の出荷を可能にした。2012年には養殖業も復活。翌2013年にはすべての組合員の手に漁船も行き渡った。現在では、宮古漁港の水揚げ高は震災前の水準にまで戻っている。

漁業がいち早く再開への道を歩み出したのとは対照的に、番屋は厳しい状況に置かれていた。宮古漁協では宮古市の協力を得て、2009年8月に鍬ヶ崎番屋を建設。漁師たちが休憩できる快適な施設を用意することで、他の地域から宮古漁港に寄港する船(廻来船)が多くなり、漁港の水揚げ高の増加や魚市場の活性化が期待されていた。しかし、建設からわずか1年半と経たずに、番屋は津波によって跡形もなく流されてしまう。

宮古漁港で水揚げができたとしても、番屋がなければ漁師たちが不便を感じ、廻来船が他の漁港に寄港してしまうかもしれない。危機感を持った宮古漁協は、当時、被災者支援のために現地入りしていた日本財団に事情を相談。番屋を漁業者だけでなく地域に開かれた施設としても活用することで、鍬ヶ崎番屋の再建が実現した。

日本財団による支援

助成金額：50,790,000円／延床面積：297.65平方メートル／建築様式：木造2階建／設備機能：会議室、洗濯室、シャワールーム

番屋の主な利用方法

- ・漁師(サンマ廻来船やイカ釣り漁船)の休憩所
- ・養殖業者や女性部(漁協)の会合
- ・水産高校の魚市場・漁船実習
- ・小学生の魚市場見学
- ・地域住民の集会所
- ・行政機関の会議や研修



番屋の活用状況

鍬ヶ崎番屋が漁師の休憩所として使われるのは、主に8月から12月。サンマの廻来船やイカ釣り漁船の漁師たちが、宮古漁港で水揚げを終えてからやって来る。

まずは洗濯機で漁師服を洗い、その間にシャワーを浴びる。シャワーでリフレッシュしたあとは、畳の敷かれた大部屋でゆっくりとくつろぐのが常だ。この部屋にはテレビもあるので、横になって疲れた体を休めつつ、テレビ番組を楽しむ漁師も多いという。サンマの廻来船やイカ釣り漁船以外にも、スケトウダラを獲るトロール船の漁師たちが来ることもある。宮古漁協に所属する組合員たちは、漁を終えると自宅に帰って休むので、番屋を利用するのはもっぱら、他の地域から水揚げに来る漁師たちだ。

震災前の番屋は、漁師以外が利用することはほとんどなかった。そのため、8月から12月を除くと閑散とした状態だったという。一方、新しい番屋では、1階の休憩スペースに加えて2階にセミナーハウスがあり、地域住民の集会や行政機関の会合、小学校や水産高校の生徒たちの学びの場など、宮古市内外の人々が多様な形で利用している。基本的に申請さえすれば、誰でも気軽に利用できる仕組みだ。こうして番屋は、1年中利用される施設へと生まれ変わった。

新しい番屋は毎週、月曜日から土曜日までオープンしている。必要に応じて、日曜日に開ける場合もある。時間は朝9時から夕方4時半までだが、水揚げの状況によって延長も可能。漁の最盛期にもなると、1ヵ月間の利用人数が500人を超えることもあるという。

特徴的なのは、番屋に管理人さんがいることだ。宮古市のシルバー人材センターから派遣された3人が交代で、管理を担当している。朝夕に各部屋の掃除をしたり、利用者の人数や所属を記録して宮古漁協に報告するのが主な仕事だ。管理人さんがいるお陰で、番屋は常に扉が開いている状態となり、漁師たちは気軽に利用することができている。

利用者の声 摂待吉男さん 鍬ヶ崎番屋 管理人

2012年9月から番屋の管理人をしています。私は宮古市出身ですが、神奈川県の大磯半島にあるマグロ漁船に乗って、約40年間、世界中で漁をしていました。定年後に地元に帰り、シルバー人材センターに登録したのですが、漁師の皆さんが利用する番屋の管理人をできると聞いたときは嬉しかったですね。

番屋を利用するのは、船内にシャワーなどの設備がない、小型船の漁師さんが多いです。今の時期はどの海域にどんな魚が来ているのかなど、漁師さんと漁の話で盛り上がることもあります。番屋には様々な漁船の漁師さんがやって来ますが、皆さん、お互いに迷惑を掛けないう、マナーを守って利用してくれていますよ。

漁師の皆さんからは、早い時期に番屋が再建されたので、とても助かったと喜ばれます。畳の大部屋やシャワールーム、洗濯室など設備が充実していることも嬉しいようです。これからも管理人を続けながら、漁師の皆さんと交流を続けていきたいですね。



重茂（おもえ） コミュニティ番屋

住所：岩手県宮古市重茂第1地割2番地3
所有：重茂漁業協同組合
完成：2014年10月

震災前後の状況

岩手県南東部の太平洋に突き出る位置に、重茂半島がある。リアス式海岸の地形が続く半島の前には、寒流の親潮と暖流の黒潮が交わる海が広がり、様々な種類の魚介類が豊富に獲れる。主力はワカメやコンブで、水揚げ高の7割から8割を占める。他には、ウニ・アワビ・サケなども獲れる。重茂半島の全444世帯のうち、実に9割にあたる390世帯が、重茂漁協の組合員として漁業に従事している。

東日本大震災の大津波は、そんな「漁業の半島」に壊滅的な被害をもたらした。814隻あった漁船は16隻を残してすべて海に飲み込まれ、半島に点在していた10の漁港もほとんどが被災。ワカメとコンブの養殖施設や加工場、サケのふ化場、アワビの稚貝の生産施設など、漁業関連の施設もことごとく破壊された。死者・行方不明者も50名にのぼるなど、近年まれに見る大惨事となった。

不幸中の幸いだったのは、重茂漁協の建物が高台にあったため、津波の被害をまぬがれたことだ。そこで漁協の職員たちは、昼夜を問わず全力で組合員への支援を続けた。

まず始めたのは、中古船を買い集め、残った船と合わせて、組合員に共同利用してもらうことだった。その結果、震災から2ヵ月後の2011年5月には、天然ワカメの収穫をすることができた。また、10ある漁港のうち4つを重点的に修復する作業にも取り組んだ。

重茂半島の人々の懸命な努力は実を結び、現在は漁港や漁業関連の施設もほとんどが復旧。水揚げ高も震災前の7割の水準まで回復している。

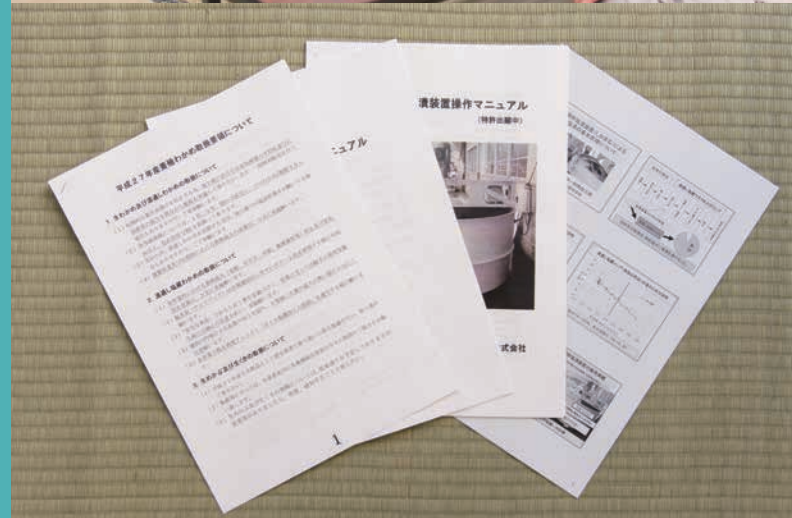
震災前、重茂半島には集会所もあったが、漁業関連の施設と同様、津波で流出していた。この集会所は、地域の住民が集会やお祭りなどで利用するだけでなく、漁業者が会合などでも使用する施設だった。そこで日本財団では、地域の拠点となる場所を復活させようと、番屋の建設を支援することにした。

日本財団による支援

助成金額：43,195,000円／延床面積：129.18平方メートル／建築様式：木造平屋建／設備機能：会議室、調理室、多目的トイレ

番屋の主な利用方法

- ・漁業者の集会や技術研修
- ・地域住民の集会や祭典
- ・青年部や女性部（漁協）の集会や学習会
- ・都市と漁村の交流拠点
- ・行政機関の会議や報告会



番屋の活用状況

重茂漁協では毎年、ワカメ・コンブの養殖業者を対象に、技術講習会を開いている。漁協の職員が、岩手県水産技術センターなどで講習を受け、新たな知識や技術を習得。その内容を、養殖業者たちに伝えている。技術講習会の最大の目的は、新たな知識と技術でワカメやコンブの品質を向上させ、養殖業者の収入を増加させることにある。

重茂コミュニティ番屋に集まった20名の養殖業者たちは、配られた資料に目を通しながら、漁協職員の話に耳を傾けていた。長年、一緒に仕事をしている仲間だけあり、リラックスした雰囲気が漂っている。漁協の職員に対しても、遠慮なく意見や質問をぶつけていた。

技術講習会では、ワカメ高速塩漬装置の技術指導が行われた。この装置は、通常のワカメ塩蔵加工にかかる時間を、大幅に短縮してくれる。重茂漁協のワカメ・コンブ養殖業者たちは、全員がこの装置を導入していた。そこで、投入するワカメの量に応じて、どれだけ装置を稼働させればよいか、最適な時間配分の指導などが行われた。また、塩分が足りなくなると食塩が溶け出る「浮き玉食塩袋」も紹介された。この技術はまだ重茂半島では導入されていないが、塩分濃度を一定に保つことのできる新しい技術として、今後の導入を検討していくという。

現在、重茂コミュニティ番屋を主に利用しているのは、漁業者を含めた地元の人々。しかし今後は、地元以外の人たちにも積極的に活用してもらおう予定だ。震災前、都市部との交流を進めていた重茂半島には、漁業や植林の体験に参加する人たちが数多く訪れていた。多種多様な魚が釣れるということで、釣り客でも賑わっていた。震災から時間が経つにつれ、重茂半島を訪れる地元以外の人々の数も増える中、重茂漁協では彼らの休憩場所や集会の場所としても、この番屋を使ってもらおうと考えている。

利用者の声 中村淳一さん 養殖組合 組合長

養殖業者にとって、互いの情報交換は欠かせません。誰が、いつ、どれだけのワカメやコンブを出荷するのか。量や時期を調整することで、漁協や加工場にも負担をかけず、結果的には市場に高品質の商品を出せることにつながるからです。

震災前は、そうした調整を集会所で行っていました。でも津波で流されてしまい、新しい番屋ができるまでの間は、漁協の一室を借りていました。ときには、面倒くさいからと立ち話で済ませてしまうこともありました。

新しい番屋ができてからは、養殖業者の仲間たちが何かあればすぐに集まれるので、本当に助かっています。建物は現代風でオシャレですし、暖房設備もしっかりしているので有難いですね。

番屋はこれからも会合などで使わせてもらいます。そして仕事仲間の交流に欠かせないのはお酒。会合のあと、番屋でお酒を飲むこともあるかもしれませんが、そこは大目に見てやってください。（笑）



三陸やまだ漁協番屋

住所：岩手県下閉伊郡山田町境田町1-5

所有：三陸やまだ漁業協同組合

完成：2014年8月

震災前後の状況

岩手県の沿岸中部に位置する山田町は、人口約1万7千人。町の目の前に広がる太平洋は、親潮と黒潮が交差する恵まれた漁場であり、水産業を中心に発展してきた。

水産業の中でも主力は、網を一定の場所に固定して魚群を誘い込む定置網漁だ。山田町では四季を通じて、サケやイナダ（ブリの若魚）、マグロ、サバ、スルメなどが水揚げされてきた。また、ホタテやカキの養殖も盛んに行われていた。

しかし、東日本大震災の大津波は、町の主力産業である水産業に壊滅的なダメージを与える。

漁船は沖合に避難した大型船を除き、そのほとんどが流出。水産加工場や作業倉庫、魚市場、養殖場などの漁業関連施設もすべて破壊された。当時、2棟あった三陸やまだ漁協の建物はそれぞれ全壊と半壊。漁協の職員や組合員に多数の死者が出るなど、人的被害も甚大だった。

同様に、定置網漁師の休憩場所として使われていた漁港近くの番屋も、津波により骨組みだけを残してすべてが流されてしまった。

震災後、漁協の職員や組合員をはじめとした漁業関係者が、水産業を復活させようと懸命に続けた努力が実り、定置網漁は2011年秋、養殖漁業は2012年の秋に再開することができた。

その一方で、番屋の再建は人手や予算の不足などの理由でなかなか進まず、定置網漁師たちは漁を再開できても、仮設のプレハブなどでの休憩を余儀なくされていた。

こうした状況を打破しようと、日本財団では津波で流出した番屋を元の場所で再建するための支援を決定。防潮堤工事に伴い移転する予定の別の番屋と合わせて、2つの番屋機能を統合した、新たな番屋が建設されることになった。

日本財団による支援

助成金額：51,340,000円／延床面積：139平方メートル／建築様式：木造1階建／設備機能：和室、調理室、多目的トイレ

番屋の主な利用方法

- ・定置網漁師の休憩場所（食事や洗濯など）
- ・女性部（漁協）の料理教室
- ・町内会の会議や会合
- ・漁業の担い手育成のための学習会や研修会
- ・水産物の直売所



番屋の活用状況

三陸やまだ漁協には16人の定置網漁師がいるが、彼らの朝は早い。月曜日から土曜日まで、午前2時には三陸やまだ漁協番屋に集合。着替えを済ませると、岸壁に停泊している船に乗り込み出港の準備を行う。出港はだいたい3時半頃。漁を終え、6時までには港に戻る。その後、漁港に隣接する魚市場で、水揚げした水産物を出荷。そしてようやく、番屋で朝食を兼ねた休憩を取ることができる。

朝の休憩が終わると、岸壁で漁網の修理を行う。海藻がからまったり、津波の瓦礫に引っかかるなどして、漁網が破けてしまうからだ。手作業で破けた網を結んでいく漁網の修理には、熟練の技が必要だという。

漁網の修理を行うのは7時から9時半頃まで。その後、最初の漁での水揚げが少ないときなど、必要に応じて10時から12時まで2回目の漁に出る。2回目の漁に出ないときは、漁網の修理などの作業を続けるのが日常的だ。そしてすべての漁と作業が終了すると、昼食の時間となる。

朝食と昼食を作ってくれるのは、三陸やまだ漁協の組合員の女性。朝食のメニューにはスルメなど、漁師たちが水揚げした水産物が登場することも珍しくない。一方、昼食は主にそばやうどん、おにぎりなど。早朝からの仕事で疲れている漁師たちが、手軽に食べられるものにしている。

漁師たちは着替え、休憩、食事、洗濯などで番屋を利用している。食事はできる限り全員が揃ってから食べる。そうした仲の良さも、仕事でチームワークを発揮する原動力になるという。

番屋は漁師たちが疲れを癒し、次なる漁へと向かうエネルギーを蓄えるための、欠かすことのできない居場所となっている。

利用者の声 高屋敷健治さん 定置網漁 リーダー

震災前の番屋は津波に襲われ、骨組みだけを残して跡形もなく消え去りました。その後、隣接する作業倉庫で休憩や食事をしていましたが、そこも骨組みにかろうじて屋根が乗っかっているだけの建物で、とても冬に利用できるような場所ではありませんでした。

2011年の11月頃から、仮設のプレハブを番屋代わりにしましたが、冬になると室内は水道も凍るほどの寒さ。畳もカーテンもない、狭い部屋です。すきま風も入って来るので、食卓にもホコリががぶつてしまうような状態でした。

番屋再建の話聞いたときは、一日も早く完成してほしいと思いましたね。

新しい番屋は天井が高く、解放感があります。調理室や洗濯機、トイレ、脱衣場など、設備もとてもしっかりしていて有難いです。何より、広い畳の部屋で食事をしながら、ゆっくりとくつろげるのがいいですね。新しい番屋のお陰で仕事の疲れも吹き飛びます。仲間の漁師たちも、とても喜んでますよ。



尾崎白浜 コミュニティ番屋

住所：岩手県釜石市平田8-75
所有：釜石湾漁業協同組合
完成：2014年7月

大槌町

釜石市

大船渡市



震災前後の状況

釜石湾漁協は、釜石市内にある3つの地域（尾崎白浜・釜石・平田）を管轄している。震災前、これらの地域では養殖漁業（ワカメ・コンブ・ホタテ・カキ）や天然漁業（ウニ・アワビ）、漁船漁業（アイナメ・カレイ・毛ガニ・タコ）、そして主力事業である定置網漁（サケ）などが盛んに行われていた。

しかし、震災により海辺にあった3地区の建物は全滅。ワカメの加工場やホタテの作業施設、水揚げした魚介類の倉庫など、漁業関連の施設も95パーセントが流出した。唯一、残ったのは内陸に設置されていた、サケのふ化場だけだった。人的被害も大きく、釜石湾漁協の組合員（漁業者）が15名、漁協職員が1名、命を落とした。

震災後の約1ヵ月間、組合員や漁協職員たちは、避難所の設営に奔走した。学校の教室や体育館、地域の集会場などを避難所として立ち上げ、朝昼晩の食事の提供も行った。

避難所の設営が完了すると、すぐに漁業の再開を急いだ。魚介類の倉庫は応急修繕して使えるようにし、碇の代わりに土嚢を海に沈めた。こうした努力が実を結び、2011年7月には定置網漁の水揚げを再開。翌8月には養殖施設の設置も完了させ、ワカメの種付けに間に合わせる事ができた。

その一方で、番屋機能を持つ施設の復旧は遅れていた。尾崎白浜・釜石・平田の3地区には、震災前、研修センターと呼ばれる施設があった。炊事場や和室を備え、漁業者や地域の人たちが会合や料理研修などで頻繁に利用していたが、津波ですべて流出していた。しかし釜石湾漁協としては、漁業関連の設備復旧に注力しなくてはならず、研修センターのための予算確保が難しかった。

こうした厳しい状況を考慮し、日本財団では番屋再建事業による支援を決定。3地区の中で研修センターの代替施設がない、尾崎白浜地区に新たな施設を建設することにした。

日本財団による支援

助成金額：41,140,000円／延床面積：137平方メートル／建築様式：軽量鉄筋コンクリート1階建／設備機能：会議室、調理室、和室

番屋の主な利用方法

- ・漁業者の会議や会合
- ・女性部（漁協）の料理教室
- ・消防団の屯所
- ・青年部（漁協）の会合
- ・地域の神事（お祭りなど）
- ・健康相談会



番屋の活用状況

尾崎白浜コミュニティ番屋では様々な活動が行われているが、中でも活発な活動のひとつに、漁協の女性部による料理教室がある。尾崎白浜地区の女性を対象に、地元で獲れる魚介類を使って、新しい料理に挑戦するという内容。減塩料理など、健康に配慮した料理も多く取り入れられている。

参加した20名の女性は、ほとんどが漁師の妻。尾崎白浜地区は人口約400人の小さな地域だが、世帯の8割以上が漁業に従事している。

メイン料理は「鮭のとろーりグラタン」。番屋の調理室に設置された新品のオーブンを使って、料理をしたいという参加者の要望を受けて決まったメニューだ。釜石市から派遣された栄養士の資格を持つ講師が、料理の作り方や食材に含まれる栄養などについて説明すると、20名の女性たちは3つのグループに分かれて調理を開始した。

和気あいあいとした雰囲気ですべて料理教室が進む中、参加者からは「本当に立派な建物」「設備も充実していて嬉しい」という声が聞かれた。調理が終わると、和室に移動して参加者全員で試食。各グループ内で出来栄や味の感想などを言い合った。次回の料理教室のメニューについて希望を聞かれると、参加者から「今度はケーキが作りたい！」などの声も上がっていた。

尾崎白浜地区では約100世帯ある家屋のうち、30軒が津波で流出。家を流された人の中には、3年以上、仮設住宅での暮らしを続けている人もいる。高齢の女性も少なくない中で、こうした料理教室が行われることで、日頃、家にもこりがちな人たちが外に出て交流する機会になるだけでなく、生活状況や健康状態をチェックできることにもつながっている。



利用者の声 佐々木淳子さん 女性部 部長

津波で研修センターが流され、その後は仮設住宅の近くに建てられた、プレハブの集会所で活動をしていました。でも、部屋は狭くて15人も入れれば満員。ガスがないので火も使えず、料理教室の活動はできませんでした。女性部の会合などで使うだけです。本当に我慢を強いられていました。

そのことを考えると、新しくできた番屋は天国みたいな場所です。こんな恵まれた場所で活動できるのだから、これからもっと頑張らなければと、みんなで話し合っています。具体的には、地元で獲れる魚介類を使って新しい料理を考えるだけでなく、実際に商品として販売できないか検討しています。

同じ尾崎白浜地区とは言え、被災の度合いは人によって異なるため、お互いに相手を傷つけないよう、どうしても気を使ってしまいます。でも料理教室をはじめ、楽しみながら集える場があれば、震災前のような関係に戻っていくと思います。誰もが気軽に集える素敵な場所ができたことに、ただただ感謝です。



森里海研究所

住所：宮城県気仙沼市唐桑町西舞根133-1

所有：NPO法人 森は海の恋人

完成：2014年4月



震災前後の状況

宮城県気仙沼市の東部に位置する唐桑半島。その付け根に西舞根地区がある。人口200人ほどの小さな集落だ。震災前は、リアス式の入り組んだ地形がもたらす、波の穏やかな舞根湾で、主力のカキをはじめ、ホタテやワカメの養殖が盛んに行われてきた。

しかし、西舞根地区の入り組んだ地形は、東日本大震災の大津波を増幅させる結果をもたらした。家屋が低地に密集していたこともあり、55軒あった家屋のうち、48軒が津波により流失。集落の人の多くは、地震後、住宅地の裏山にある高台へと避難したが、4名の方が命を落とした。気仙沼市へと続く道路も寸断され、集落は完全な孤立状態に陥った。

1989年から西舞根地区で活動続ける森は海の恋人も、活動の休止を余儀なくされた。森は海の恋人は震災前、落葉広葉樹の植樹をはじめとする森づくり、子どもたちを対象にした体験学習や自然観察会などの環境教育、研究者による動植物や海岸動物などの調査を通じた自然環境保全という、3つの活動を柱にしていた。中でも、山からもたらされる栄養分は海を豊かにするという考えのもと、地域漁業の繁栄を見据えて行われる森づくり活動は、全国的に高い評価を得ていた。

震災後、まずは集落のカキ養殖を復活させるために、森は海の恋人は長年の活動で培ったネットワークを活かして、全国から道具や材料などを集め、地元の漁師や近隣の漁協に提供していた。その後、集落内外の人々の要望に応える形で、毎年行われている植樹祭や子どもたちの体験学習を復活させるなど、徐々にNPOとしての活動を再開していた。

その一方で、事務所がないのが悩みの種だった。震災前は漁業の加工場などを間借りし、震災後は職員の実家を使うなど、森は海の恋人は厳しい環境の中で活動を続けていた。そこで日本財団では、舞根湾の沿岸に新たな施設を建設。森は海の恋人の活動拠点にするとともに、地域内外の人々が集い、様々な活動を行える場所として活用することにした。

日本財団による支援

助成金額：99,990,000円／延床面積：約500平方メートル／建築様式：木造2階建／設備機能：会議室、観察・分析室、交流室、事務・研究室

番屋の主な利用方法

- ・森は海の恋人の事務所
- ・水産物の調査や研究
- ・自然環境の調査や研究
- ・体験学習やワークショップ



番屋の活用状況

森は海の恋人の主要な活動のひとつに、子どもたちを対象にした体験学習がある。養殖いかだの観察や湿地、浜辺の生物観察などを通じ、自然環境と自分たちの生活のつながりを感じてもらうのが目的だ。震災前から続くこの活動は、震災により一度は休止を余儀なくされたが、親や子どもたちの要望を受けて復活した。

体験学習は四季を通じて行われているが、冬の活動のひとつに釣り体験がある。舞根湾ではこの時期、アイナメやエゾイソアイナメ（タラの仲間）、カレイなどが釣れる。子どもたちは釣った魚を自分たちでさばき、食べることで、海の生き物についてより深く学ぶようになる。

朝から行われる釣り体験に参加したのは、11人の子もたち。全員が地元・気仙沼市の出身だ。学年は小学4年生から中学2年生まで。リピーターとして何度も参加している子も少なくない。

はじめに、森は海の恋人の畠山信・副理事長から、糸の通し方やおもりの付け方など、釣りざおの説明が行われた。釣りざおの準備が終わると、森里海研究所の目の前にある舞根湾で、いざ釣りの開始。釣り針にエサとなるエビを取り付け、いかだに開けられた穴から釣り糸を垂らす。子どもたちは寒さにも負けず、元気いっぱい釣りを楽しんでいた。

強風が吹いていたこともあり、残念ながら釣果はゼロ。子どもたちは森は海の恋人が用意してくれたお昼ごはんを食べると、また釣りに挑戦したり、近隣の浜辺に出かけるなどして、自然の中で思い思いの時間を過ごしていた。終了後には、「魚が釣れなかったのは残念だけど、楽しい一日だった」など、子どもたちで感想も言い合った。

特徴的だったのは、子どもたちへのケアがしっかり行き届いていたこと。子どもたちが外へ出るときは必ず、森は海の恋人の職員やボランティアスタッフが同伴するなどして、常に大人がそばにいる態勢を敷いていた。

利用者の声

紺野祐樹さん ボランティアスタッフ



2013年から森は海の恋人の活動に参加しています。2014年4月に森里海研究所が竣工したときも、式典の準備などのお手伝いをしました。

森里海研究所ができる前も、様々な施設を借りて活動を続けていましたが、トイレが男女兼用だったり、水場が屋外にあったりなど、不便を感じていたのも事実です。新しい施設は広しい設備も充実しているので、ボランティアスタッフの間でも使いやすいと好評ですよ。

そして森里海研究所が完成したことで、活動の幅も大きく広がったと思います。

例えば体験学習としては、キャンプや釣り体験などがありますが、以前はどちらも夏に行われていました。でも森里海研究所ができたおかげで、今は冬でも釣り体験ができます。舞根湾の目の前にこれだけ立派な施設があれば、釣りの途中で寒くなったり強風が吹いたりしても、すぐに子どもたちは避難できますからね。現場を担当するボランティアスタッフとしても、安心感を持って活動できていますよ。

大谷海岸番屋

住所：宮城県気仙沼市本吉町三島14番地3
所有：宮城県漁業協同組合 大谷本吉支所
完成：2014年3月



震災前後の状況

宮城県気仙沼市の南部を占める位置に、本吉町がある。人口1万1千人ほどの、太平洋に面した町だ。海沿いには日本一海水浴場に近い駅として知られる大谷海岸駅があり、震災前、大谷海岸一帯は多くの観光客や海水浴客で賑わっていた。水産業としては、カレイ、秋サケ、イサダ(オキアミの一種)などの漁船漁業のほか、ワカメの養殖も盛ん。天然のアワビやウニも獲れる。また、秋サケのふ化事業は、県内でもトップレベルを誇っていた。

しかし震災の津波により、大谷本吉支所の組合員が所有していた漁船の8割以上が流失。ワカメの塩蔵加工施設やアワビ・ウニの集荷施設も、ほとんどが流されてしまう。大谷海岸沿いにあった支所の建物も全壊。サケのふ化場も被災し、仮復旧をするまでに半年以上の期間を要した。定置網漁師が使用していた番屋も流された。人的被害も大きく、組合員27名が津波の犠牲となり、家族まで含めると90名近くの方が命を落とした。

震災後、高齢者を中心に漁業を廃業する人が相次ぎ、漁業者の数は震災前から2割も減ってしまう。組合員の自宅も半分以上が全半壊し、多くの人々が仮設住宅での生活を余儀なくされた。大谷海岸の海水浴場は閉鎖され、とても観光客を見込める状況ではなかった。

先の見えない状況の中、大谷本吉支所の職員や組合員は、漁業を再開しようと懸命に努力を続けた。その結果、秋サケのふ化やワカメの養殖は、震災の年に再開することができた。現在では養殖施設はほぼ100パーセント復旧し、水揚げ量も8割まで回復している。

一方、支所の建物や番屋、また、ほとんどが津波で全壊した地域の集会所などは、再建が遅れていた。そこで日本財団は支所の建物があった場所に、こうした施設の機能を集約した、新しい形の番屋を再建した。1階には大谷本吉支所の事務所と調理スペースを配置。2階はコミュニティルームとし、漁業者の休憩や会合の場だけでなく、地域の人たちの集会所としても利用されている。



日本財団による支援

助成金額：40,950,000円／延床面積：198平方メートル／建築様式：軽量鉄筋2階建／設備機能：事務室、調理スペース、コミュニティルーム

番屋の主な利用方法

- ・大谷本吉支所の事務所
- ・漁業者の休憩や会合
- ・地域の集会所
- ・女性部(漁協)の加工品製造
- ・町内会の会議や会合



番屋の活用状況

震災前、大谷海岸の道の駅では、地元のカボチャを使った「黄金まんじゅう」とワカメの中芯などを使った「浜福神漬け」が販売されていた。2つの商品を作っていたのは、大谷本吉支所の女性部のメンバー。「おばちゃん倶楽部」という名称で活動していた。

活動のきっかけは、1995年にさかのぼる。当時、大谷海岸の浜辺には、ワカメの中芯が数多く捨てられていた。中芯は商品として使えない部分だったからだ。これを「もったいない」と感じた女性部のメンバーたちは、調理して商品化することを検討。料理の専門家を招き、試行錯誤を重ねた結果、中芯を生のまま塩蔵加工することにした。3年後には、ニンジンやごぼう、唐辛子など6種類の野菜を加え、「浜福神漬け」として道の駅で売り出すようになる。1997年には、並行しておまんじゅう作りも開始。その昔、本吉町は金の産出地として平泉の黄金文化を支えた地域だったこともあり、まんじゅうの生地にカボチャを練りこんだ「黄金まんじゅう」を開発した。「黄金まんじゅう」と「浜福神漬け」は、平成20年度の農林水産大臣賞を受賞するなど、高い評価を得ていた。

しかし震災により、道の駅に隣接していた作業場の加工センターが全壊。「おばちゃん倶楽部」は活動休止を余儀なくされたが、新たに再建された番屋の中に調理スペースができたことで、活動を復活することができた。

現在、「おばちゃん倶楽部」のメンバーは4名。週5日、早朝から「黄金まんじゅう」と「浜福神漬け」の製造に汗を流している。震災前は、1日400個作っていた「黄金まんじゅう」が、道の駅で午後1時には完売してしまうほどの人気だった。もう一度、当時の人気を復活させようと、「おばちゃん倶楽部」のメンバーたちは頑張っている。

利用者の声 齋藤節子さん 「おばちゃん倶楽部」メンバー

地震が起きたとき、私たちはいつものように加工センターで働いていました。地震がおさまってから、メンバーはそれぞれの自宅に帰りましたが、これほどの大被害になるとは想像もできませんでした。

それから2年3カ月の間、私は仮設住宅で暮らしました。「おばちゃん倶楽部」の活動はもう無理だろうと思いました。メンバーは違う仮設住宅に入居してバラバラになり、集まる機会すらなくなってしまったからです。

新しい番屋の中に調理スペースができるという話を聞いたとき、活動を再開できるかと思いました。そこでメンバーで集まり、話し合った結果、またみんなで頑張ろうという結論に至ったのです。

メンバー4人の年齢は60代から80代。最初はワカメの中芯がもったいないからと、ボランティアで始めた「おばちゃん倶楽部」の活動も、今では給料をもらえるまでになりました。でも何より、昔のようにみんなで集まることが嬉しい。この番屋のお陰で、楽しく働かせてもらっています。



長面浦(ながつらうら)番屋

住所：宮城県石巻市長面字平六1番地3
所有：宮城県漁業協同組合 河北町支所
管理：一般社団法人 長面浦海人
完成：2014年10月

震災前後の状況

石巻市の北上川河口近くに、長面浦がある。かつては海だったが、外海である太平洋から隔離され、海跡湖(かいせきこ)となった場所だ。太平洋とは水路でつながっている。

震災前、長面浦ではカキの養殖と刺し網漁が盛んだった。特にカキは波が穏やかなことに加え、周囲の山々にある広葉樹林からミネラル豊富な栄養が流れ込むため、1年足らずで出荷できるほど生育が早かった。長面浦は長面地区と尾崎地区の2地区で構成されているが、両地区の人々は長面浦のカキに恵みをもたらす広葉樹林を大切に、植樹や間伐などの環境活動にも熱心に取り組んできた。また、野菜や米づくりなどの農業も盛んで、都市部からの訪問者を地元の農漁村の民家で受け入れるなど、交流活動にも力を入れていた。

しかし、東日本大震災の大津波は、長面浦の地形を変えてしまうほどの猛威をふるう。当時、長面地区に146世帯、尾崎地区に58世帯の人々が暮らしていた。長面地区では民家をはじめ公民館や集会所などすべての建物が流出。尾崎地区も災害危険区域に指定された。その結果、両地区の人々は地元から20キロ離れた仮設住宅での生活を余儀なくされた。

長面浦で養殖していたカキも、ほとんどが津波にさらわれてしまった。漁師たちは、カキ養殖を復活させるために懸命な努力を続けたが、復旧作業の間中も、そして養殖を本格的に再開できるようになってからも、仮設住宅から長面浦に来るために片道20キロの道のりを毎日往復しなければならなかった。震災前は、自宅や長面浦に隣接していた宮城県漁協・河北町支所の事務所で、休憩や着替えをしていたが、建物は津波で全壊。震災後は、屋外にブルーシートを敷いて休憩せざるを得なかった。

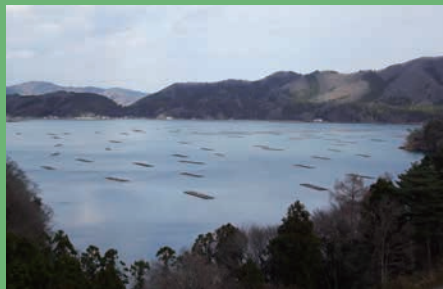
このような状況下で、漁師らが漁業や地域再生の拠点となる番屋建設を希望。漁業やコミュニティの拠点として、また震災前から続く消費地交流の経験を活かし、豊かな自然や海産物の美味しさを伝える場としたいという熱意に応え、日本財団が支援を決定した。

日本財団による支援

助成金額：21,000,000円／延床面積：141.61平方メートル／建築様式：木造1階建／設備機能：会議室、調理室、作業場(土間)、縁側
他団体助成(市民の絆フランス及び特定非営利活動法人市民の絆ジャパン)：3,000,000円

番屋の主な利用方法

- ・漁師や地域住民の休憩所
- ・コミュニティカフェ
- ・地場特産品のレストラン
- ・地域住民の集会所
- ・体験学習やワークショップ



番屋の活用状況

長面浦番屋の建設は、地元の人たちの希望を受けて行われた。2012年秋から漁師らが月1回のペースで「長面浦の復興と漁業を考える会」を開催。建築家らによる支援チーム(竹内昌義＝東北芸術工科大教授、大沼正寛＝東北工業大准教授、松野由夏＝design studio Hutte、中島みゆき＝東京大)とともに話し合いを重ね、「地域再生の第一歩」として番屋建設を目指してきた。番屋には地域の人々が気軽に集まれる広い縁側や軒下、漁師が作業着のままでも休憩できる土間など、復興への思いが随所に反映されている。

そして番屋が完成したことで、建設に関わった人たちの「労をねぎらう会」が行われた。

集まったのは、カキ漁師など地元の人々をはじめ、建設を担った建築家や大工など100名近く。また、2011年の秋まで、長面浦の復旧を支援するためにガレキの撤去などを行った、関東圏のボランティアの皆さんも駆けつけた。

冒頭、番屋を運営している長面浦海人の小川英樹・代表理事から、開会の挨拶が行われた。小川さんは震災前、石巻市でサラリーマンをしていたが、2012年6月に長面浦に戻り、父親と同じ漁師の道を歩み始めている。

「長面浦の復興や番屋の建設に携わった人々への感謝の会にしたいと、この会を開きました。おいしい海産物をたくさん食べて、楽しんでいってください」

番屋の前では長面浦で養殖されたカキをはじめ、ホタテやアナゴの炭火焼、また、秋サケのチャンチャン焼きなど、多彩な魚介類が振る舞われた。番屋の中では地元のお母さんたちが、ホタテ飯やイクラ丼も用意してくれた。また、小川さんが船を出し、希望者を乗せて番屋の目の前にある長面浦を周遊。丸々と太った養殖カキも見せてくれた。

長面浦の人たちは誰にでも気軽に声をかけてくれる。「労をねぎらう会」では地元も外部も関係なく人々が交流しながら、震災直後の大変だった状況の思い出話や番屋を建設するまでの苦労話などに、花を咲かせていた。

利用者の声 濱畑千代子さん はまなすの会 会長

はまなすの会は、女性メンバー5人で活動している生活改善クラブです。長面浦で収穫される農水産物を使って、新しい郷土料理や健康によい料理などを考えています。

震災により仮設住宅で暮らすことになり、長面浦に帰って来ても休めるような場所や施設はありませんでした。でも新しい番屋ができたことで、またメンバーが長面浦に集まることができます。今後は番屋を拠点に、新しい料理の研究も始めていく予定です。

新しい番屋は外観も内装もオシャレで、女性メンバーに好評です。長面浦に釣りをしに来る人たちにも、落ち着く場所だと言われました。

長面浦のカキは地域の自慢の食材です。でも、身が小さかったり形が悪かったりして、中には出荷できないものも残念ながらあります。それらを調理加工して市場に出すことも、この番屋でしてみたいですね。



宮戸番屋

住所：宮城県東松島市宮戸字前田57番1

所有：宮城県漁業協同組合 宮戸支所

完成：2014年1月

石巻市

松島町

東松島市



震災前後の状況

日本三景のひとつとして知られる、宮城県の松島。その一角を占める奥松島に、宮戸地区がある。世帯数250ほどの小さな集落だ。震災前は、ノリやカキの養殖、また、スズキやカレイ、ヒラメをはじめとする定置網漁が行われていた。中でも、ノリの養殖が盛ん。近隣の3つの川から、山の栄養分が豊富にもたらされた海で獲れるノリは、天皇家に献上したことがあるほど評価が高く、宮戸地区の売上の9割を占める主力商品だった。

宮戸地区でノリ養殖に従事する人たちは、自宅に加工機械を置き、水揚げされたノリを自ら加工し、宮戸支所を通じて出荷していた。しかし、東日本大震災の津波により、多くの加工機械が流出してしまう。それでも取引先からの出荷依頼に応えようと、津波を逃れた加工機械を使い、ノリ養殖業者が協力し合うことで、震災の年の秋にはノリ生産の再開にこぎつけた。生産量は震災前に比べ減ってしまったが、震災後は全国的にノリの流通量が少なく、高値で取引されたことにより、ノリ養殖業者の収入を支える結果となった。

その一方で、宮戸支所は厳しい状況に置かれていた。震災の津波により3階建ての事務所は2階まで浸水。建物の取り壊しを余儀なくされた。その後、企業から支援されたプレハブを、約3年間、事務所代わりにした。夏は蒸し暑く、冬はすきま風が入る、狭いプレハブの中で、宮戸支所の職員は地域の水産業を復活させるために仕事を続けた。

宮戸支所の建物が失われたことで、ノリ養殖業者をはじめとする組合員の漁業者たちも、不便を強いられた。震災前は、漁業者の会合場所として事務所を活用していたからだ。また、多くの漁業者が仮設住宅で生活するようになり、磯の香りがついた漁具を自宅に置くことも、近隣住民への配慮からできず、自家用車の中などに保管せざるを得なかった。

こうした状況を鑑み、日本財団では宮戸支所の建物を番屋として再建することを決定。事務所機能に加え、漁業者や地域住民も利用する地域拠点になることを目指している。



日本財団による支援

助成金額：38,220,000円／延床面積：231.64平方メートル／建築様式：木造2階建

設備機能：事務室、コミュニティルーム、PCルーム、防災設備（自家発電用エンジン）

番屋の主な利用方法

- ・宮戸支所の事務所
- ・漁業者の休憩や会合
- ・子どもたちの漁業体験
- ・パソコンを使った情報収集や講習
- ・地域住民の集会所や避難場所



番屋の活用状況

宮戸番屋の利用方法のひとつに、子どもたちの体験授業がある。内容は様々だが、圧倒的に漁業体験が多い。中でも、地域の主力産業であるノリの養殖は欠かせない。震災によりノリ養殖業者が自宅に持っていた加工機械の多くは流失してしまったが、自己資金で機械をすべて揃えるのは困難だった。そこで国の補助事業を活用し、宮戸地区に大型の加工施設を複数建設。ノリ養殖業者がグループに分かれ、加工作業を続けている。宮戸番屋の目の前にも、3棟が並ぶ加工施設があり、8人のノリ養殖業者が共同で使用している。

宮戸番屋の目の前にある、ノリの加工施設を訪れたのは、地元の宮戸小学校に通う3年生と4年生の6人。引率の先生と一緒にやって来た。まずは、加工施設内にある機械を見学。養殖場から水揚げされたノリを、きれいに洗い、ゴミを取り除き、真水に浸して塩分濃度を下げ、水分を取り、乾燥させて出荷用の商品にするまでの一連の工程を学んだ。子どもたちからは、「ノリは1日にどれくらい獲れるのか」「いくらで売れるのか」など、様々な質問が寄せられていた。

見学が終わると、加工施設の軒先でノリ漉き(すき)体験が行われた。その昔、手作業でノリの加工が行われていたのと同じように、子どもたちは生ノリを細かく刻み、簀(す)の上に並べた木枠に流し込んで水気を切り、天日で乾燥させる作業を体験した。ノリ漉き体験には、ノリ養殖業者に加え、宮戸支所の職員を引退した人や地域住民もボランティアで参加。子どもたちにひとつひとつの作業を丁寧に教えていた。

その後、宮戸番屋のコミュニティルームに移動。子どもたちは「手間をかけてノリを作っていることが分かった」「ふだん経験できないことを経験できてよかった」などの感想を発表し、体験授業は無事に終了した。

宮戸支所では今後、体験授業に加え、仮設住宅に暮らす人たちの集会所や自然災害が起きた際の避難所など、地域の拠点としても活用してもらえよう、番屋の利用を促していく方針だ。

利用者の声 佐々木啓悦さん 宮戸小学校 校長

宮戸小学校の体験授業は、漁業を中心に地域の中で様々な体験をさせてもらえる、教育的にも意味の深い活動でした。震災の影響で活動は休止してしまいましたが、宮戸番屋が完成したことで再開することができました。本当に感謝しています。

これから宮戸番屋は、漁業者や地域住民にもたくさん活用される、よい場所になることでしょう。

現在、宮戸小学校の全校生徒は23名。少子化に加え、震災の影響で生徒数は激減しました。2016年の3月には、近隣の地区の小学校に統廃合されることも決まっています。統廃合されると、宮戸地区には小学校がなくなってしまいます。でも番屋があることで、また子どもたちが集い、学習する機会もできると思います。

地域に子どもたちの声が響かなくなるのは寂しいこと。その意味でも、宮戸番屋にはこれからも頑張してほしいですね。



完成番屋一覧

	番屋名	所有団体	完成年月	支援金額
岩手県	八木みなと番屋	種市南漁業協同組合	2014年9月	37,120,000円
	鯨ヶ崎(くわがさき)番屋	宮古漁業協同組合	2012年8月	50,790,000円
	重茂(おもえ)コミュニティ番屋	重茂漁業協同組合	2014年10月	43,195,00円
	三陸やまだ漁協番屋	三陸やまだ漁業協同組合	2014年8月	51,340,000円
	尾崎白浜コミュニティ番屋	釜石湾漁業協同組合	2014年7月	41,140,000円
宮城県	森里海研究所	NPO法人 森は海の恋人	2014年4月	99,990,000円
	大谷海岸番屋	宮城県漁業協同組合 大谷本吉支所	2014年3月	40,950,000円
	長面浦(ながつらうら)番屋	宮城県漁業協同組合 河北町支所 一般社団法人 長面浦海人(管理)	2014年10月	24,000,000円
	宮戸番屋	宮城県漁業協同組合 宮戸支所	2014年1月	38,220,000円
合計:9番屋				426,745,000円

建設中番屋一覧

	番屋名	所有団体	予定完成年月	予定支援金額
岩手県	小袖定置組合番屋	小袖定置網組合	2015年4月	50,400,000円
	未定	新おおつち漁業協同組合	2015年12月	50,000,000円
宮城県	鳴瀬番屋	宮城県漁業協同組合鳴瀬支所	2015年2月	35,410,000円
	未定	牡鹿漁業協同組合	2015年8月	56,160,000円
	未定	宮城県漁業協同組合	2015年4月	59,400,000円
合計:5番屋				251,370,000円

財源と協力団体

番屋再生事業の財源には、全国の地方自治体が主催するボートレースの売上金の約2.5%にあたる交付金が使われています。

また、宮城県漁業協同組合・河北町支所が所有する長面浦(ながつらうら)番屋の再生事業では、フランスの人道支団体であるSecours Populaire Français(市民の絆フランス)様と特定非営利法人市民の絆ジャパン様より、合計300万円のご寄付をいただき、番屋の建設費用として活用させていただきました。

建設費用のご協力以外でも、一般社団法人日本定置漁業協会様より現地の事前調査などにご協力いただきました。

さらに、以下6名の方には、合計4回開催した「番屋懇談会」を通じて、番屋再生事業に関する貴重なご意見をいただきました。

馬場 治 東京海洋大学海洋科学部海洋政策文化学科(漁業経営学)・教授
山内 裕 宮城県漁業協同組合経営統括室・班長
後藤 均 岩手県漁業協同組合連合会指導部・部長
三浦秀樹 全国漁業協同組合連合会漁政部・次長
小林 憲 一般社団法人大日本水産会漁政部・部長
森 義信 一般社団法人日本定置漁業協会・専務理事

番屋再生事業の実現にご協力いただいた皆様に、厚く御礼申し上げます。

日本財団 海洋事業担当
海野光行(常務理事)
荻上健太郎(チームリーダー)
和田真(リーダー)
濱崎菜穂美(事業担当)



本報告書の制作には、「復興応援 キリン絆プロジェクト」の財源が使われています。

公益財団法人 日本財団

〒107-8404 東京都港区赤坂1-2-2

TEL : 03-6229-5111 FAX : 03-6229-5110